服をめぐる

衣服の研究現場より

一人一品

和菓子作家 杉山 早陽子

19

2022.4

TAKE FREE

公益財団法人 京都服飾文化研究財団（KCI）広報誌

服をめぐる 19

一人一品
和菓子作家×KCI収蔵品
杉山早陽子「茉莉花」「野の露」 p4

KCI Wunderkammer
1920年代のブラジャー p12

地産街道を行く
京都市 染色ものがたり② p14

今日の補修室 第19回
補修室の七つ道具④ p20

KCIギャラリー展示 お知らせ
「熊谷登喜夫：軽やかに時を超えた靴デザイナー」展 p22

お知らせ p24

本誌について

『服をめぐる』は、京都服飾文化研究財団（KCI）が収蔵する膨大な西洋服飾コレクションを手がかりに、服飾の歴史や文化を分かりやすくお伝えする小冊子です。文学者やアーティストからの視点、日本の伝統産業との関わり、研究現場からのレポートなど、さまざまな観点から服飾の世界にアプローチします。服をめぐる旅が今、ここから始まります。

京都服飾文化研究財団（KCI）とは

京都服飾文化研究財団（The Kyoto Costume Institute, 略称 KCI）は、西洋の服飾やそれにかかわる文献資料を収集・保存し、調査・研究する機関として、1978年に株式会社ワコールの出捐によって設立されました。現在、18世紀から現代までの衣装など服飾資料を約13,000点、文献資料を約20,000点収蔵。それらを多角的に調査・研究し、その結果を国内外での展覧会（「ドレス・コード？ ── 着る人たちのゲーム」展、「FUTURE BEAUTY：日本ファッションの30年」展、「モードのジャポニスム」展など）や、研究誌（『DRESSTUDY』、『Fashion Talks...』）の発行を通じて公開しています。　Website　https://www.kci.or.jp/

Dress Code: Are You Playing Fashion? / Dress Code. Das Spiel mit der Mode, Photo: Laurin Schmid, 2021 © Kunst- und Ausstellungshalle der Bundesrepublik Deutschland GmbH, Bonn, Germany, May 21 until September 12, 2021

表紙の収蔵品

『フイエ・ダール（Feuillets d’art）』誌より

出版社：Feuillets d’art
発行年：1919年
発行地：パリ

植物で覆われたバルコニーで若い女性が何かに気づき、振り返っている。手元に運ばれてきた手紙。ラブレターだろうか。本品はスペイン出身の画家でイラストレーター、エドゥアルド・ガルシア・ベニートによって描かれた。1910年代にキュビズムに影響を受け、対象物を抽象化したイラストを描くようになる。また、『フェミナ』誌、『ヴォーグ』誌などのファッション誌の表紙や挿絵を手がけ、フランスやアメリカで人気を博した。
『フイエ・ダール』誌は1919年に編集者リュシアン・ボージェルによって創刊された、毎号1500部限定の豪華な芸術誌。1922年まで不定期に発行された。美術、演劇、文学、ファッションなど幅広い芸術ジャンルをカバーし、ジャンルごとに本品のようなイラスト作品が数枚ずつ挟み込まれている。イラストレーターにはベニートをはじめ、G.バルビエ、C.マルタン、G.ルパップら人気の作家が参画した。

一人一品　和菓子作家 × KCI収蔵品

杉山 早陽子

Sayoko Sugiyama

著名人が各々の目を通し、KCIの収蔵品を語る「一人一品」。
今回のゲストは、和菓子作家の杉山早陽子さん（「御菓子丸」主宰）です。

杉山さんが和菓子の道へ進んだのは、大学在学中に偶然出会った写真集『和の菓子』がきっかけだったそうです。その写真集に収められた作品から、表現方法の一つとして和菓子の可能性に気づき、この道を志すようになったといいます。大学卒業後は老舗和菓子店で販売員として勤務し、和菓子の知見を深めながら、独学で和菓子を制作するようになりました。2006年〜2016年には、同じく和菓子職人の友人とともに「日菓」として活動。2014年からは「御菓子丸」主宰として、和菓子の制作、展示、販売を手掛けています。

杉山さんは著書の中で、なぜ和菓子を作るのかという問いに対してこう語っています。

数ある食べ物の中でなぜ和菓子なのか。
それは、日本のお菓子に込められた美しさや儚さを知り、その魅力と自分の想いとを結晶化できてこれたからだと思っています。

（御菓子丸　杉山早陽子著『そのときみえるもの』torch press 2018年）

四季のうつろいや人びとの想いからイメージをふくらませ、和菓子という形に結晶させる杉山さん。今回の「一人一品」は、杉山さんにKCIの収蔵品から2点選んで頂き、新たな和菓子を制作いただきました。杉山さんの言葉とともにお伝えします。

「今回、実際の衣装から和菓子を創作するにあたり、当時、この衣装を着ている人が食べるとしたら、どんなものを作ってあげたいか…、ということを念頭におきました。」

「創作するとき、草花や風景、美術作品からイメージすることもありますが、抽象的なもの、例えば言葉の概念からインスピレーションが生まれることもあります。」

「和菓子って季節を感じさせる食べ物ですよね。春の花や秋の風景を表したり、見た目にとても美しいです。だけど、伝統的な和菓子って旬の食材を使うことがほとんどないんです。私は古い慣習に縛られず、季節の食材も積極的に使っていきたいな、と思っています。」

「和菓子って通常は約6割が砂糖ですが、私の和菓子は4割程度のものも多いです。甘味が少なくても美味しいと思えるものを日々、考えています。」

杉山さんが選んだ収蔵品

輸出用室内着

1906年頃　日本製
京都服飾文化研究財団所蔵、林雅之撮影

西洋向けに日本で製作された室内着。クリーム色の絹サテン地に藤、菖蒲、燕、鷺が絹糸で刺繍されている。両脇にマチ、後ろ腰にプリーツが入っていることから、当時西洋で流行していたスカート裾が広がるドレスの上に合わせる形だったことが分かる。きものは20世紀初頭に欧米で室内着として大流行した。そのブームに商機を得た日本の呉服店は、西洋向けの室内着を盛んに製作し、輸出した。本品は髙島屋の前身、飯田髙島屋製と考えられている。

収蔵品から生まれたお菓子①

茉莉花 マツリカ

材料：山の芋、白小豆、きび砂糖、ジャスミン（茉莉花）、オオイヌノフグリ

制作によせて

この衣装は、輸出品として当時の日本人が西洋人のことを想像して作ったものだと聞き、私もこの衣装を作った人と同じ立場に立ってみたい、と思いました。きもの風でありながら、西洋衣装に合わせるように作っていますよね。なので、私も日本的なものと西洋的なものをうまく合わせたいな、と。山の芋のきんとんの御菓子ですが、オオイヌノフグリという春に咲く花をあしらって、この衣装の雰囲気に見立てています。そして中の餡はジャスミン茶で風味をつけた白小豆で作っています。和とも洋ともいえない味ではないかと思います。当時、これを着た人も新しい文化に接する好奇心があったのだと想像します。もしこれを着た人にこの御菓子を差し上げるなら、同じ感覚で食べてもらいたいな、と。

杉山さんが選んだ収蔵品

キャロ姉妹店 イヴニング・ドレス

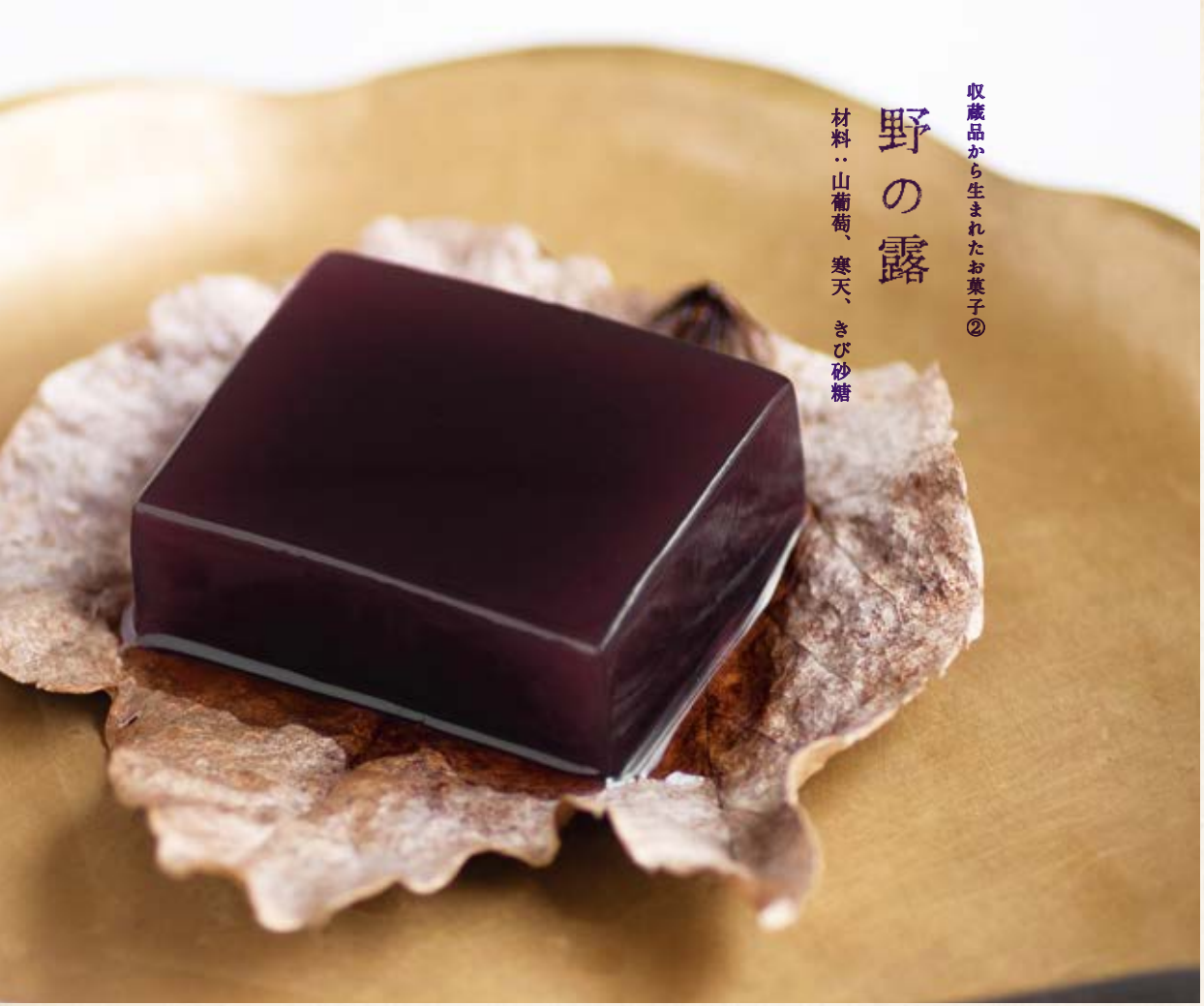
1908年頃　フランス製
京都服飾文化研究財団所蔵、操上和美撮影

黒と紫の絹シャルミューズ製のツーピース・ドレス。金糸・銀糸で草花模様が刺繍されている。衿や打ち合わせ、裾の構成は日本のきものを思わせる。キャロ姉妹店は、中国や日本をはじめとする東洋のモチーフを取り入れた作風で人気を博したパリ屈指のオートクチュール・メゾンの一つ。同店の経営者姉妹の長姉、マリー・ジェルベールは浮世絵のコレクションをするなど、当時のジャポニスム（日本趣味）に傾倒していた。

収蔵品から生まれたお菓子②

野の露

材料：山葡萄、寒天、きび砂糖



制作によせて

最初にこの衣装を見た時、とても素敵な色だな、と思いました。言葉では言い表せない、深くニュアンスのある紫です。そして生地の光沢が美しいと。この衣装を着た西洋の女性が華やかなパーティで食べる御菓子を想像した時、この生地のようにツルっと光沢のあるゼリーが良いのではないか、と思いました。また、この衣装はフランスの有名なメゾンで作られたものだと聞きましたが、日本のきもの風の打ち合わせやお引きずりのような裾があります。御菓子に使った果汁は山葡萄で、少し野性味のある日本原産の野葡萄です。日本のそれとははっきり分からないけど、忍ばせているのがこの衣装と重なるかなと思い、作りました。下に敷いた葡萄の葉も衣装に刺繍された草花模様をイメージしています。

珍品奇品も数多いKCIの収蔵庫――そこはまさに「驚異の部屋」。

京都服飾文化研究財団所蔵　畠山崇撮影

KCI WUNDERKAMMER

ブラジャー

素材：絹（ジョーゼット、サテン、レース）
原産国：不詳
製作年：1920年代

およそ100年前のブラジャーは今のものと似たような形をしている。細いストラップがあって、後ろで留めるフックが付いている。しかしディテールをみてみると、カップやワイヤーはない。ペロンとした薄い生地にレースがはめ込まれ、小さな花飾りが付いているだけ。なんとも心もとない気がするが、当時は平たんな体つきが流行していたため、この形状で十分だったのだ。（筒井）

（参考）『Art-Goût-Beauté』誌　1925年4月号
京都服飾文化研究財団所蔵

地産街道を行く

KCIの収蔵品にみられる技法や素材を手がかりに、各地を訪れます。

京都市 染色ものがたり②

KCI収蔵品

ジャケット

1790年頃　フランス製　京都服飾文化研究財団所蔵　小暮徹撮影

細かな縞柄の綿平織りによるジャケット。欧州では、赤は17世紀ごろまで高貴な色として尊ばれ、法官や司教などの特権階級を象徴した。18世紀後半になると赤は次第に広い階層で着られるようになっていった。

図1　ジャケットの裾部分。先染めした綿製の赤い糸と黒い糸によってストライプが織り出されている

前号に引き続き、京都市内の大学で教鞭を執りながら染色業を営む青木正明さんにKCIの収蔵品の色とその染め技法についてお話を伺いました。

＊前号はオンラインでご覧頂けます。
https://www.kci.or.jp/publication/pdf/pr/fukuwomeguru_018.pdf

KCI（以下、K）：前回は、1720年代の絹織物にみられる「緑」の染色のメカニズムについて教えて頂きました。化学式が出てくる場面もありましたが、青木さんのお話は分かりやすくてとても面白かったです。今回は「赤」の染色についてお伺いしたいと思います。

青木（以下、青）：赤も面白いですよ。今回は1790年頃のジャケットが題材ですね。

K：はい。女性用のジャケットで、フランスで作られたと考えられています。200年以上経っていますが、なかなか良い状態で保存されていて、退色もあまりみられません。

青：少し暗みを帯びた鮮やかな赤ですね。

K：黒い経糸を使ってストライプ柄を織り出しています。本品のような細かなストライプ柄は18世紀末によく見られる流行の生地です（図1）。

青：美しいですね。そして素材は綿ですね。前回は絹織物でしたが、染色をするにあたって綿か絹かの違いは大きいんです。

K：前回、綿は絹に比べて染まり難いとおっしゃっていました。

図2　セイヨウアカネの地上部。ヨーロッパから中国にかけて広く分布する（青木正明氏提供。武田薬品・京都薬用植物園にて撮影協力）

図3　セイヨウアカネの乾燥根。これを染料として使う

青：はい。天然染料で染める場合はそうです。タンパク質が主成分の絹やウールは天然染料と相性がいいんですが、セルロースが主成分の綿や麻は相性が悪くて染まり難く、色落ちもしやすいんですよ。

K：そうなんですね。しかし、本品が作られた時代は未だ天然染料しかありません。赤の染料といいますと、植物のアカネやスオウ、そして前回のお話でも出てきましたラックカイガラムシなどの虫がありますが…。

青：いずれも綿には染まり難いんですが、実は古くからインドにはアカネを使って赤を鮮やかに染める技術があって、18世紀後半にそれがヨーロッパに伝わったんです（図2）。

K：ということは、本品はアカネで染められていると？

青：おそらくそうだと思います。ヨーロッパで「トルコ赤」と呼ばれた技法です。

K：ああ、「トルコ赤」は染色の歴史書に出てきますね。たしか、トルコからヨーロッパにもたらされ、流行した染色技法だったかと…。

青：インドの技法がトルコ経由でヨーロッパに伝わったんです。綿織物の生産が盛んだったインドは綿に対応する染色技術がとても発達していました。

K：インドで使われていたアカネはヨーロッパにもあるんですか？

青：いえ、インドアカネとセイヨウアカネはそれぞれ色素が違いますが、似たような工程で染めることができたようです。いずれもアカネの根っこを使用します（図3）。

K：難しい工程なのでしょうか？

青：ええ。フランスの染色研究者、ドミニク・カルドンさんが自身の著書に書いているのですが、当時、「トルコ赤」を染め上げるには1か月も要したらしいんですよ。しかも、セイヨウアカネの根っこや媒染剤（注）のミョウバンの他に、羊やヤギの血、魚の脂やオリーブオイル、動物の糞なども使った、と。作業中は悪臭が酷かったので、「トルコ赤」を染めている街には関係者以外に誰も住んでいなかったらしいです。本品を見せてもらった時は、悪臭はしなかったですが（笑）

K：作られてから200年以上経ってますし、当時もさすがに悪臭のある服は着ないでしょうね（笑）。悪臭を消す何らかの処理がされていたのかも。それにしても、想像を絶する材料です。

青：どこまで真実か分かりませんが、確かに動物の血に含まれるアルブミンは様々な物質と結合しやすい性質があるので赤色色素以外の不純物とくっつき、染色の工程で一緒に取り除かれた可能性は大いにあります。結果、鮮明な赤の仕上がりに貢献した、と（図4）。

K：試行錯誤のうえで辿り着いた材料だったのかもしれませんね。それで、青木さんの近著『伝統色づくり解体新書「天然染料と衣服」』では、セイヨウアカネで綿織物を染める再現をなさったんですよね。

青：はい。動物の血や糞を用いる18世紀の染色方法ではありませんが、セイヨウアカネを用いて染めてみました。媒染剤としてミョウバン、助剤に酢を使用しています。セイヨウアカネの赤色色素はアリザリンといって、インドアカネのプルプリンに比べると色素量が少なくてピンク寄りの赤に染まる傾向にあるのですが、結構、綺麗に染まりましたよ。

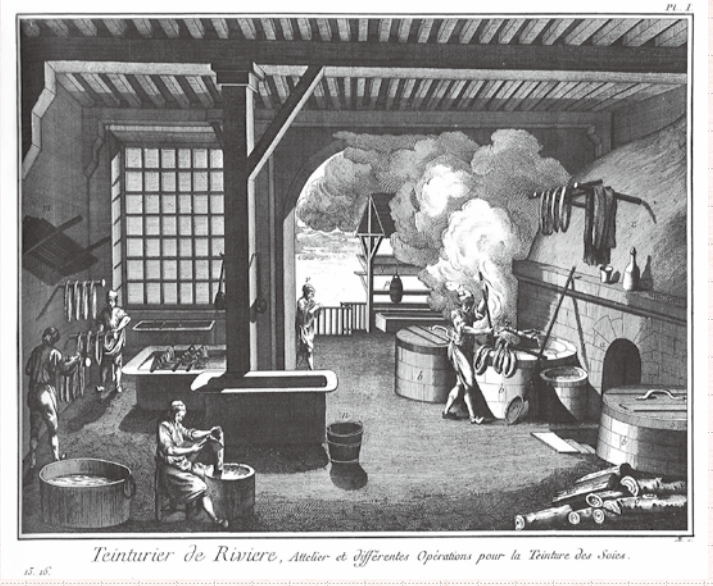


図4　18世紀ヨーロッパの染色工房の様子。ディドロ編『百科全書』（1762〜72年）より

図5　樹木に寄生し、100匹近く群がって死骸の塊になったラックカイガラムシ（青木正明氏提供）

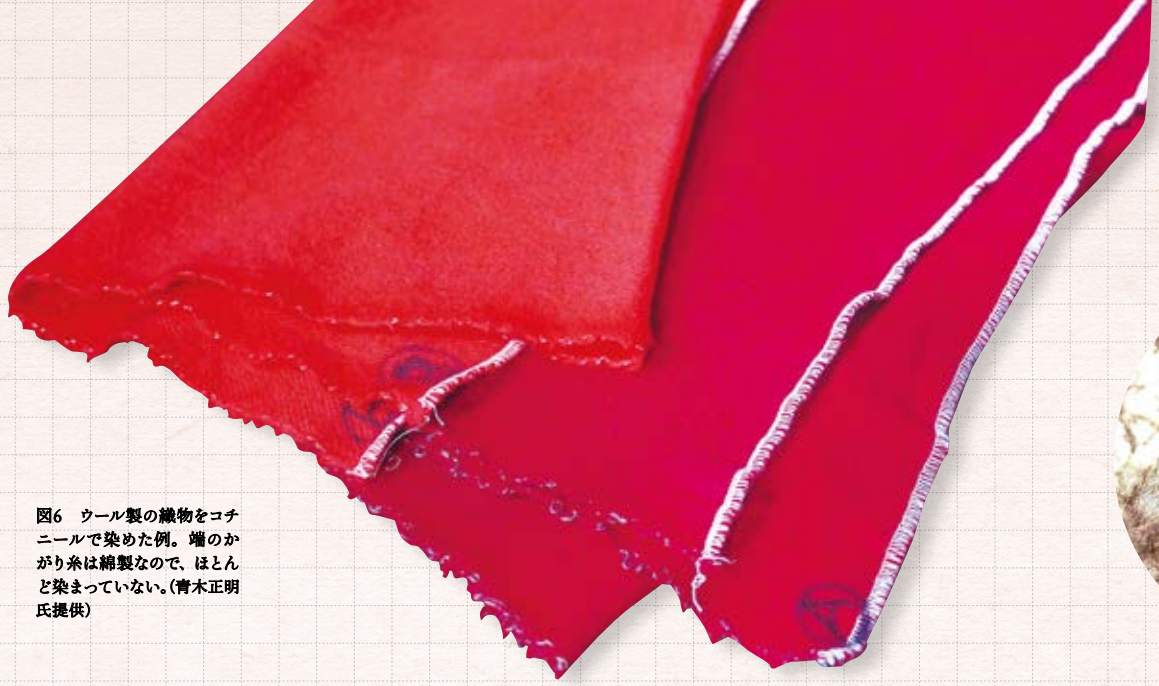


図6　ウール製の織物をコチニールで染めた例。端のかがり糸は綿製なので、ほとんど染まっていない。（青木正明氏提供）

K：本書が完成し、拝読できるのを楽しみにしています！それで、もう一種類の赤の染料である虫についても少しお話を聞かせてください。大学の授業などで学生に「赤色染料の虫は食品にも使われることがあるので、皆さんも知らず知らずのうちに口にしていますよ。」と話すと皆かなり驚いて、興味を持つ学生が多いんです。

青：ははは、そうでしょうね（笑）。虫を食べているなんて思いませんよね。

K：赤色色素を持つ虫は、ラックカイガラムシ、ケルメス、コチニールなど植物に寄生するものがありますが、これらは生息地が違うだけで、仲間と思っていいのでしょうか？

青：はい。それぞれの色素はまぁ親戚同士と思ってもらって大丈夫です。ですが、姿かたちはずいぶん違うんです。前回も少しお話しましたが、ラックカイガラムシは蝋っぽい形状です。図5がそれですが、この塊はざっと100匹が集まったものかと。まず、メスが幼虫の時に所せましと枝に取りつき、それぞれ口を枝にさして樹液を吸い始めます。その間にオスが交尾するのですが、オスはそのまま死にます。メスは樹液を吸い続け、体から汗のようなものとして樹脂を出し続け、それが体全体を覆って隣のメスの樹脂とも合体してあんな塊になっていきます。その過程で卵を産み、そのうちメスも死にます。卵から出た幼虫は塊から穴をあけて出ていき、新しい枝を探す旅に出るんです。

K：すごい…。全く知りませんでした。

青：ははは（笑）。ラックカイガラムシはこのように蝋化しているので、砕いて熱すぎない湯に浸してじっくり待たないと染液になりません。それに比べてコチニールやケルメスは個体が乾燥した状態のものなので使いやすいです。いずれにしてもドレス1着を染めるのに何万匹も必要なんです。

K：赤は17世紀ごろまで高貴な色だったのも納得です。法官や司教など特権階級の服の色でしたね。彼らの服は高価な絹織物や毛織物で、虫で鮮やかに染めたものだった、と伝わっています。

青：図6はコチニールでウールの織物を染めてみたものです。媒染剤が違うので色味が少し違いますが、どちらも濃く美しい色が得られました。それで最初の綿の話に戻りますが、端のかがり糸を見てください、これ綿なんです。ほとんど染まっていないでしょう？

K：ほんとですね、綿は染まっていない！そう考えると、綿を鮮やかに染める「トルコ赤」がいかに画期的で、ヨーロッパでもてはやされたかが分かります。

青：本当にそうですね。たとえ染めるのに1か月かかったり動物の糞を使わなければならなかったとしても、安価かつ大量に染めることができたわけですから。

K：赤の染色も奥深くて面白いお話でした。ありがとうございました。次回は19世紀後半に登場した合成染料のお話を伺いたいと思います。どうぞ宜しくお願いいたします。

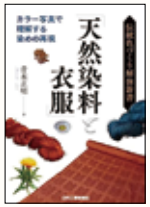
青：次回は合成染料が発明された当時の衣装が見られるのですね、どんな色なのかすごく楽しみです。

（敬称略）

聞き手・筒井直子

2022年2月23日 取材

（注）媒染剤…繊維が染料で直接染まらない場合に用いる染料を定着させるための薬剤。鉄やミョウバンなど。



『伝統色づくり解体新書「天然染料と衣服」カラー写真で理解する染めの再現』（日刊工業新聞社）

青木正明氏 プロフィール

天然色工房tezomeya主宰、京都光華女子大学短期大学部准教授兼務。
東京大学医学部保健学科を卒業後、株式会社ワコールにて企画業務を担当。草木染めを利用した企画に携わる中で天然染料への造詣を深め、退社し廣田益久氏に師事。古代染色研究家 前田雨城氏の作品に感銘を受け、古代染色研究のため2002年に独立。

KCI収蔵品の補修、保存を行う「補修室」より日々の奮闘を綴ります。

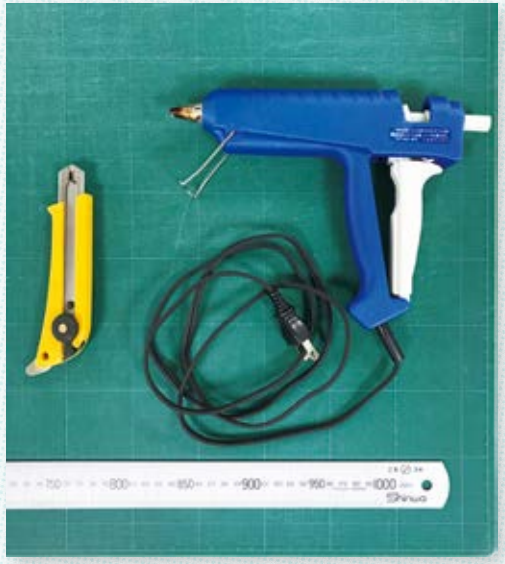
TODAY'S RESTORATION ROOM

今日の補修室

第19回

補修室の七つ道具④

今回は収蔵品の保存容器をご紹介します。



保存容器作りに欠かせない道具。カッター、金属製の定規、カッターマット、グルーガン（糊付け用の器具）を用いて、保存容器を作ります。

KCIの収蔵庫には、ドレスなどの衣装のほかに、靴や帽子・アクセサリー等、様々な形や素材の収蔵品が納められています。

それらの中には、壊れやすいもの、それだけでは自立しないもの、また、いくつかのピースをひとまとめに収納する必要があるものなど、収蔵庫での保管に一層配慮が必要な収蔵品も含まれています。

補修室ではこのような収蔵品の特徴に合わせた保存容器を手作りしています。「アーカイバルボード」と呼ばれる中性紙でできた段ボールで外箱を作り、その後、収納するものの特徴にそった工夫を施して組み立て、保存容器を完成させます。

収蔵品を保存容器に収納することは、安定した状態を保つだけでなく、埃や光から収蔵品を守ったり、日常作業での取り扱い事故を未然に防ぐなど、いくつものメリットがあります。今回の「今日の補修室」は、KCI収蔵庫で実際に使用されている保存容器の例をいくつかご紹介しましょう。

（伊藤 ゆか）

七つ道具その④ 保存容器

Sample 01

香水瓶（1990年代）のための保存容器

Sample 02

パンプス（1950年代後半）のための保存容器

保存容器の中を二分して、同時代の香水瓶を一緒に保管しています。

拡大図

ガラスの香水瓶が割れないよう、プラスタゾートという腐食ガスを出さない緩衝材で固定具をつくり、保存容器内で動かないようにしています。

拡大図

シュー・キーパーは形に合わせてくぼみを設けています。

上段には付属のシュー・キーパーを収納。

下段にはパンプス本体を収納。

拡大図

パンプスはかかとと先にアーカイバルボード製の固定具を作り、収蔵品が保存容器内で動かないように工夫をしています。

KCIギャラリー展示

「熊谷登喜夫：軽やかに時を超えた靴デザイナー」展を開催しています。

熊谷登喜夫　パンプス
1984年秋冬
京都服飾文化研究財団所蔵
熊谷登喜夫氏遺贈
林雅之撮影

1980年代、身近な花や動物、有名なアート作品など、ユーモアと想像力にあふれたデザインの靴を次々と発表し、足元のファッションを彩ったデザイナー、熊谷登喜夫[1947−87]。

彼の活動、そして生涯は惜しくも短いものでしたが、その中で生み出された作品は今なお色褪せない魅力を持ち、時代を超えて多くのデザイナーに影響を与え続けています。

熊谷登喜夫の生誕75周年となる2022年、KCIギャラリーでは熊谷がデザインした1980年代の靴を中心に展示しています。加えて、KCIが収蔵する18世紀から現代までの靴も出品し、靴デザインの歴史的変遷も併せて紹介しています。是非ご覧ください。

展示概要

展覧会名	収蔵品紹介33　熊谷登喜夫：軽やかに時を超えた靴デザイナー
会期	2022年1月31日(月) ～ 6月24日(金)
開館時間	午前9時30分～午後5時
休館日	土・日・祝日
会場	KCIギャラリー ＊予約制・86m² 京都府京都市下京区七条御所ノ内南町103 株式会社ワコール京都ビル内
入場料	無料
出展作品	トキオ・クマガイの靴、アクセサリーなど　約40点。 18世紀～現代までの靴　約15点。＊一部展示替えあり

＊本展は完全予約制です。
予約方法・新型コロナウイルス感染症への対応についてはこちら▶

すべて熊谷登喜夫の作品（京都服飾文化研究財団所蔵　福永一夫撮影）

おしらせ

2022年4月から京都新聞にて
コラム「装いの名品」が連載中です。

京都新聞朝刊1面、新連載コラム「装いの名品」が2022年4月1日から始まりました。

本コラムではKCI収蔵品の中から選りすぐりの逸品を取り上げ、1年間にわたりKCI学芸員が歴史的、文化的な視点をもとに毎日、1作品を紹介します。ぜひご覧ください。

（2022年4月1日 京都新聞）

装いの名品

京都服飾文化研究財団所蔵

西洋が愛した着物 ①

19世紀後半に日本は鎖国を解き、日本から渡った染織品が西洋の人々を魅了しました。当時の西洋は、着物姿での外出は許されなかったため、西洋式のドレスに仕立て直されました。（関防珠美）

（4月1日）

ドレス（ターナー・イポリス、1897年代、部分）リチャード・ホートン

京都新聞講読のお申込みはこちらから
▶ https://ssl.kyoto-np.jp/koudoku/script/
＊デジタル版もあります

服をめぐる

「服をめぐる」衣服の研究現場より　第19号
2022年4月28日発行
—

発行
公益財団法人 京都服飾文化研究財団（KCI）
〒600-8864
京都府京都市下京区七条御所ノ内南町103
株式会社ワコール京都ビル内
電話：075-321-9221
ウェブサイト：https://www.kci.or.jp/

編集：筒井直子、福嶋英城（京都服飾文化研究財団）
デザイン：坂田佐武郎、桶川真由子（Neki inc.）
写真：成田舞（Neki inc.）

編集後記

KCIの収蔵品約400点を掲載した『ファッション：18世紀から現代まで　京都服飾文化研究財団コレクション』（タッシェン社、ドイツ）は2002年に発行され、現在では10か国語に翻訳されて世界中で販売されています。そしてこのたび、世界販売が累計60万部を突破しました。20年の長きに渡り、世界中の人々が手に取って下さっていると思うと感慨ひとしおです。これからもKCIの収蔵品が多くの人に愛されることを願っています。